

面会室の扉が軋んだ音を立てて閉まつた。重い金属の音は、鉄格子の奥に沈黙を置いていく。

そこにいたのは、蹄のついた脚を組み、柔らかな布で目元を覆つた一人の獣人ミュータント

——いや、今や思想犯として収監された男、ヤフヤだつた。

「……何の用だい？ もう事件の供述は終わつたはずだろう」

ヤフヤは鼻先をわずかに動かし、訪問者の香りと足音からおよその人となりを測る。視界を日常的に塞いでいる彼にとって、習慣的な行為だつた。

制服の布地の香り、そこに染みついた香水の香り、安物のペンの香り。足音はやや固い。……女で、まだ若手の記録管と推測できた。

「本日は……過去の関係者について、補足的に伺えればと」

「……ふむ。過去の関係者、か。もしかして【メロン】の話か？」

ヤフヤは口元だけで笑つた。軽薄さのない、静かな見透かしだつた。

記録管は一瞬口ごもつたが、すぐに頷き直す。緊張が抜けきらない様子だった。

「はい。……彼とあなたには古い付き合いがあつたと、いくつか証言が出ています」

ヤフヤは深く、何かを呑み込むように、息をつく。

「彼について、君たちはどこまで知ってるんだ？」

「彼は無戸籍者でした。市民登録にも、該当データがなくて。ただ、戦線の立ち上げに関わっていたという証言は多く得られています。……あの事件の前後との関係を、いま整理しているところです」

「丁寧な建前だ。つまり君たちは、『なぜあれほどの事件を起こすまで彼が追い詰められたのか』を探つてるってことか」

それだけ言って、ヤフヤは背もたれに深く体を預けた。頬の筋肉がわずかに引き攣る。かつての友人の名が、いかに苦味を含むものとなつたかを、その表情が物語ついた。

「どこから話そうか。僕が彼に出会ったのは——そうだな、まだ二十歳ぐらいの時
か。街角で、化け物退治に巻き込まれた時だ」^{ミュータント}

ヤフヤの声が、少しだけ遠くなつた。音として変わつたのではない。言葉の奥に、
過去の温度が混じつた。

「随分派手にやられたよ。物音に気付いてこつちを覗く人もいたけど、すぐ見なかつ
たことにして去つて行つた」

「……彼はそうではなかつた？」^{メロン}

記録管の推測を、ヤフヤは首肯した。

「あつという間だつた。彼にとつては、あの程度慣れっこだつたろう。手早く三人の
男を叩きのめして、僕に手を差し伸べた。それが始まりだ」

ヤフヤの指先が机の縁をゆっくりなぞる。繋がれた鎖が微かに擦れ合う音が、室内
に新たな静寂を落とした。

ヤフヤ獄中聴取録

「それから何度か顔を合わせるうち、”組織を作ろう”と言い出したのも彼だった。表向きは能力者の自衛のため、だつたかな……いや、もつと単純な言葉だった。俺たちの居場所を作ろうぜ”。そんなふうに言つてた」

記録管は、その言葉の奥に揺れる何かを感じた。

それは確かに、今この面会室の中で語られる革命家の言葉だった。

だが同時に、そこには少年の面影もあつた。過去の希望に心を焦がし、その火傷の跡を隠しきれない少年の。

「彼は……群れを編むことの天才だつた。暴力だけじやない、酒や冗談や、時には共感まがいの言葉で、居場所のない者たちを集めた。僕はそこに意味を見た。秩序からはじかれた能力者たちが、自らの力を肯定できる場所。夢想していた光景が、輪郭を結んだ気がした」

「……彼はあなたにとつて先達であつたと、そういう風に聞こえますが」

「そうだな、先達だつたとも。彼なくして、今の僕も【戦線】も有り得ない」
目隠しの下から、少しだけ鼻が鳴つた。

「彼が【解放前線】を立ち上げると言つた時、僕は正直、眩しかつた。僕なんかじや
辿り着けない場所に、彼はあつさり足を掛けてしまつた。無戸籍者で、職もなく、学
もなく、それでも街の誰よりも社会を読んでいた」

ヤフヤの語り口は、あくまで穏やかそのものだつた。だが、その芯には何か硬いも
のがある。敬意とも、軽蔑ともつかぬ思いが、彼の言葉の一つひとつにまつわりつい
ていた。

「彼にとつて誤算だつたのは、集まつた者たちがまっすぐだつたこと。誰も彼も、ほ
んとうに変わりたいと願つていた。差別を無くしたい、仲間を守りたい、意味を持ち
たい——そんな、真剣な眼差しばかりだつた

「彼は……嫌がつた？」

「笑っていたよ、最初は。うまくいつたって顔をしてね。旗を掲げただけで、勝手に人が集まる。言葉もいらない。力を示せば、それだけで従う。彼は“群れ”が動き出す音を聞いていた筈だ。しかし、そこにあつたのは、従順な兵隊じやなく、希望を信じる人間たちだったわけだ」

目隠しの奥に沈黙が流れ、その耳が、わずかに動いた。

面会室の空調の音が、鉄と埃の匂いを運んでくる。だが彼の意識は、今そこにはなかつた。昔日の、熱と、声と、視線の渦にあつた。

やがて、ヤフヤが再び口を開いた。

「そこからは早かつた。彼は徐々に口数が減つていったよ。居場所が狭まつていくのを、きっと本人が一番感じていたはずだ」

「そして最後は、あなたが彼を追放した?」

「……ああ。僕が言った。“もう君にはいてもらわなくていい”ってね」

やや間を置いた言葉は重く、それでいて明瞭だった。紙に落としたインクのよう
に、言葉がゆつくりと沈み、拡がっていく。

「彼は喚いたり暴れたりはしなかった。ちょっと笑って……それから姿を消した。僕
らが覚悟していたような、恨み言一つさえなかった。その手の別れに慣れていたんだ
ろう。たぶん、ずっとそうやって生きてきた。僕らが彼らを見限つたんじやなく、む
しろ逆だったのかもしれない」

記録管は、しばらく言葉を継げなかつた。

ヤフヤの声に、悲哀はなかつた。あまりに静かで、あまりに乾いていた。その乾き
の中に、湿り気のある哀しみが、影のように張りついていた。

「最後に彼と会つたのは、たしか……」

その言葉は、思つたよりも静かに落ちた。

「……グニパヘリルの一件の、三日前だつたかな」

記録管が、思わず息を呑んだ。空調の音に紛れる程度の微かな音だったが、それを聞き取つたらしいヤフヤの耳がひくつく。

「バーで偶然会つた。正直……声をかけるかどうか迷つたが、向こうは気にしてないみたいだつたけれどね」

「……どんな話を？」

「他愛のない話さ。昔の仲間の近況、酒の味、街の騒がしさ。彼の調子は一緒にいた頃と変わらなかつた。時間だけが通り過ぎて、彼だけが置いていかれたみたいだつた」

」

今度はヤフヤが、息を吐いた。その息は笑いにも、嘆きにもならず、重く空気を揺らすだけだつた。

「最後に言つたんだ。『また群れでも作るのか？』って。彼は『もういいよ、めんどくせえ』って笑つていた。……本心だつたと思うよ」

ヤフヤの語り口は淡々としている。その余白の多さが、むしろ記録管の胸を締め付けた。言葉にされない何かが、壁に染み、空気を濁している。

「……あなたは、彼の最後をどう受け止めていますか？」

ヤフヤはしばらく考えるように口を開ざした。

沈黙の中、彼の蹄がかすかに床を打つ音が面会室に響いた。それは時間を刻むようでもあり、何かを探る足音のようでもあった。

「彼は……そうだな。妙な言い方になるが、よく生きたと思うよ」

記録管の手が止まる。思わず顔を上げた彼女の視線へ、ヤフヤは目隠し越しに応じた。

「彼は諦めたとか、自暴自棄になつたとか、そういうわけじやがないんだ。やり方はどうであれ、グニパヘリルでの事件は、彼が生きようとした結果だと思う。牙を剥いて、手を汚して——ただ、世界がそれを許さなかつただけさ」

ヤフヤ獄中聴取録

怒りも悔いもなかつた。ただ静かで、正しさや間違いでは測れない何かが、そこにあつた。

「誰も弔わないだろう。名も、墓も残らない。けれど彼は、僕の始まりだつた。理想に燃える僕に、現実という名の鋗びた刃を突きつけてきた男だ。切り捨てたつもりでも、結局、僕の中にはまだ彼がいる」

少しだけ間を置いて、彼は続けた。

記録管に、もはや彼の言葉を書き留めることはできなかつた。ただ黙つて、そこにいた。

——面会時間、終了です。

機械的なアナウンスが響き、室内の空気が切斷されたように変わつた。

記録管が立ち上がり、ヤフヤに一礼する。彼は立ち上がりもせず、目隠しの奥でただ頷いた。

ヤフヤ獄中聴取録

面会室の扉が開き、記録管が出ていく。重い金属の音が再び響いた。
その音を背に、ヤフヤはただ一人、静かに呼吸を続けていた。言葉を失った空間の中、彼だけがまだ、語りの続きを生きていた。